

『四十九日のレシピ』

森次男

2013年 ギャガ 129分

監督 タナダユキ

原作 伊吹有喜「四十九日のレシピ」

脚本 黒沢久子

出演 永作博美、石橋蓮司、二階堂ふみ、

岡田将生、原田泰造

原作は地元四日市出身の伊吹有喜、同名小説をタナダユキが映画化した。ヒロイン百合子役は2011年に公開された『八日目の蝉』で日本アカデミー賞を総なめにした演技派女優の永作博美が演じている。父親役は個性派ベテラン俳優の石橋蓮司が演じて可笑しくも温かなやりとりが、リアルな息遣いとして伝わってくる。この作品は亡くなった母の「幸せに生きるためのレシピ」を通じて、残された家族が心の傷を抱えながらも、自身の人生について考え、再生に向かっていく姿を温かく描いている。

冒頭のシーンで継母になる乙美(萩野友里)が心をこめて作った重箱の弁当を5歳の百合子(後の永作博美)が突然地面にたたき落とす、成長した百合子は不妊治療を受けており、

さらに夫(原田泰造)は浮気相手を妊娠させてしまい離婚を迫られているなど「暗い題材？」と思った瞬間、場面が33年後の熱田家になると不思議な少女・イモ(二階堂ふみ)の登場で、思い描いた暗いイメージが完全に裏切られ、泣いて、笑って、とても優しい気持ちにさせられた。

イモ役の二階堂ふみは役が乗り移ったかのように生き生きと演じて、不妊症や離婚問題の深刻な場面を緩和させている。将来が楽しみな女優である。その反面、岡田将生が演じるハルの存在感がぼやけたのが残念である。

映画の軸は、突然に亡くなった母(乙美)が遺した「暮らしのレシピ」の中に「私の四十九日には大宴会をしてほしい」というメッセージがあり、それに沿って彼女の生きた証のために年表を思いつくが、突然死のために言いそびれた事、聞きそびれたことが多く、家族でありながら母のすべてを知らない百合子と父は、母の知り合いを訪ね歩くが年表は埋まらないまま当日を迎えてしまう。

果たして、「四十九日の大宴会」は遺言通りに実行できるであろうか？サスペンスドラマでもないのにドキドキさせられる演出が心憎い。

結果はまったくご都合主義ではあるが、親戚や母が世話をした若者たちがぞくぞく訪れて、年表も完成し百合子たちの離婚危機も乗り越え、新しい人生が動き出すというハッピーエンドストーリーである。

この映画の中で特に印象に残ったセリフがある。母の乙美が百合子に遺した言葉で「迷ったら川に来ると良いよ！迷う気持ちを流して前に進めるから！」この作品は、自分の家庭環境と少し類似している設定部分があり、共感出来た。

